

『海の向こうから考える桜ヶ丘キャンパス』 海外学会の楽しみ方

犬童 寛子

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 先進治療科学専攻
腫瘍学講座 顎顔面放射線学分野

経済、文化のボーダーレスに伴い、科学技術も飛躍的に進歩し続けており、それに対応していくためにもグローバル化に対応した教育、国際交流の重要性が問いただされている。今日の国際化社会において、海外での国際会議、学会への参加はさほど困難なことではなく、我が国における学術研究活動の状況 - 平成16年度学術研究活動に関する調査結果によると、1年間に海外で開催された国際会議・学会等で発表したことのある者は、全研究者の13.3%に当たる25,358人だという。私も年に1~2回の割合で海外の学会に参加している。私がよく参加している海外の学会はSFRBMという米国のフリージャカル学会で、この学会は非常にレベルが高く、とても勉強になるのでできるだけ参加するようにしている。実は先月(2010年11月17日~21日)、SFRRRI & SFRBMが米国フロリダ州オーランドで開催され、参加してきたばかりである。

今回、サブテーマが海外学会の楽しみ方ということなので、実際に海外の学会でどのように過ごしているのか、そしてその楽しみ方を紹介したいと思う。

鹿児島からオーランドまでは鹿児島 - 羽田、成田 - ダラス、ダラス - オーランドと2回乗り継ぎが必要となる。当講座の馬嶋教授と二人で鹿児島を出発し、成田からは府立医大の先生二人と合流し、オーランドへと向かった。旅は道連れとはよくいったもので、たくさんの方が楽しいものである。トランジットの待ち時間も話をしていると退屈することもなく、トイレに行くにも荷物を見ていてもらえるので助かる。成田からダラス経由でオーランドまでの飛行機の中では発表の準備をしたり、映画を見たり、あとはお酒を飲んで寝ていたり。16時間近くかかり、やっとオーランドの空

港に到着。オーランドは暑くて、昼間は半袖で充分の気候だった。オーランドの空港からはレンタカーで会場のホテルまで向かった。ナビ付きのレンタカーで、日本のナビと比べると画面の表示はややアバウトな感じであったが、GPSはさすがにアメリカの方が優れていて細かいところまで案内してくれるので結構助かった。ホテルはリゾートホテル。真ん中にプールがあり、そのプールを取り囲むようにしてホテルが立ち並んでいた(図1)。夕方から夜になると肌寒く薄手の長袖が必要だったが、こちらの人は体感温度が違っていらしく、夜もビールを飲みながら泳いでいる人がいて驚いた。

オーランド二日目、学会は夕方のウェルカムパーティーから始まるので、朝のうちにレジストレーションだけ済ませ、昼間はアウトレットへ。オーランドはディズニーランド、シーワールドといったリゾート地なので、アウトレットがやたらとたくさん存在している。平日の昼間であるにもかかわらず、たくさんの方が集まっ



(図1)

てきていた。さすがにアウトレットだけあって安かったが、時間があまりなくて全部見て回れず、不完全燃焼のまま学会場へと戻った。ウェルカムパーティーでは、顔見知りの日本人の先生にもたくさんお会いし、一緒に食事とお酒を楽しんだ。その後は教授の部屋で宴会。ちょうど3日前にお子さんが生まれた先生がいらっしゃったので、昼間アウトレットで出産祝いにベビー服を買い、Walmart (大型スーパー) でケーキとお酒を買っておいだ。こちらのケーキは色彩豊かといえば響きはいいが、身体に悪そうな色のデコレーションがほとんどで、味はただ甘いの一音である (図2)。お祝いのパーティーに集まったのは全部で15人、宴会は夜中まで続いた。

オーランド三日目、学会は朝8時からスタート、朝食は会場に用意されているベーグルと果物とコーヒー (図3)。会場もセッションごとに行くつかに分かれているので、最初にすべてのプログラムを見て、自分の聞きたい演題はあらかじめチェックしておくことが大切である。基本的には午前中はレクチャー、午後はオーラルプレゼンテーション、夕方からはポスタープレゼンテーションというプログラムであった。英語の苦手



(図2)



(図3)

な私にとっては、集中して聞いていないと途中でわからなくなるので、発表を聞いているだけでも結構疲れる。

夕方のポスタープレゼンテーションは、ビールやワインを飲みながら2時間のフリーディスカッションであった。興味のあるポスターのところに行き、色々と質問をしたり話をしていたらとあっという間に2時間が過ぎていた (図4)。

この日の学会はポスタープレゼンテーションで終了、そのあとはNBAのバスケットを見るためにダウントウンへと出かけた。オーランドマジックとフェニックスサンズ戦であった。スポーツ観戦はどちらかというところではテレビで見る方が全体を把握できるので私は好きなのだが、テレビでは味わえない迫力と会場の熱気というものとはとても素晴らしいものであった。結果は当然、地元マジックの圧勝であった (図5)。

オーランド四日目、学会は昨日と同じく朝8時からスタートし、ベーグルをかじりながらレクチャーを聞いた。お昼休みはたっぷり2時間あるので、車で10分のところにあるアウトレットでランチ。そして前回見てまわれなかったところを駆け足で見てまわり、あ



(図4)



(図5)

という間にお昼休みも終わった。午後からのオーラルプレゼンテーションでは睡魔に襲われ、ちょっと辛かったが頑張って勉強した。その後のポスタープレゼンテーションも無事終わり、この日の夕食は日本人38人で近くのシーフードレストランへと出かけた。さすがはアメリカ、日本人にとっては料理の量が多すぎるので、テーブルごとに数人でシェアする形で注文をした。この方が少しずついろんな料理を食べることができるのでうれしい。料理もワインも美味しく、また話も弾み、とても楽しい時間を過ごすことができた。

オーランド五日目、この日は私のポスターの発表の日。今回、アジアのフリーラジカル学会の Young Investigator Award (私が若いかどうかは別として、日本のフリーラジカル学会では女性は45歳まで応募できる)に応募していたので、朝からいつになくちょっと緊張気味であった。お昼からのオーラルプレゼンテーションは聞いていてもあまり頭に入ってこなかった。ポスター発表では何人かの先生にいいアドバイスを頂いたり、実験に関するいい情報を教えていただいたりと、とても有意義な時間を過ごすことができた。2時間はあっという間に過ぎ、無事終わって安心した。

この日の夕食はバンケット。授賞式があるため、ちょっとドレスアップしてバンケット会場へと向かった。会場では適当に空いているテーブルに座り、各々テーブルごとに料理を食べはじめる。食事はコース料理で、次から次に料理が運ばれてくるので、急いで食べないとすぐにお皿を下げられてしまう。シャンパンから始まり、ワインを飲みながら食事をし、デザートを食べ終わるまで40分ぐらいだったと思う(図6)。日本だと乾杯の前にスピーチがあるのが一般的だが、海外だとだいたい食べ終わって頃からスピーチが始まる。スピーチのあと、授賞者のコールが始まった。あまり期待していなかったので、私の名前が呼ばれた時にはと

ても驚いた。頑張って研究していて本当によかったなと実感する瞬間であった。賞状と賞金をいただき、授賞式が終わるとともにバンケットは終了した(図7)。

オーランド六日目、学会最後の日。学会はお昼で終了するため、ほとんどの人が帰っていて、学会に参加する人は少なくなっていた。午後からはお土産を買うためにダウントウンディズニーへと出かけた。ディズニーワールドではなく、ディズニーグッズを扱っているお店やシネマ、レストランなどがあるちょっとしたディズニーの街である。学会が終了したので、ディズニーワールドに行かれた先生方も結構いたが、私は今回一度もディズニーワールドには行かなかった。

最後の夕食は多数決でステーキに決まり、隣のホテルのステーキハウスへと出かけた。お肉は思っていたよりも柔らかく、味付けもシンプルで美味しかった。食事がまもなく終わろうとしていたちょうどその時、火災警報器のもの凄いい音がなり始めた。我々を含め食事をしていただお客は皆、すぐさまレストランの外に出された。原因は誤作動だとわかっていたのだが、こちらでは警報器の音を自分たちで止めることができず、消防車が到着するまで待つよりほかないのだとお店の人が話していた。消防車が到着し、うるさかった警報器の音がようやく鳴り止んだ。騒動が落ち着いたあと支払いを済ませ、ホテルへと戻った。オーランド最後の夜は消防車のサイレンとともに幕を下ろした。

帰国の朝。5時前にはホテルを出て、空港へと向かった。オーランド-ダラス、ダラス-成田、羽田-鹿児島と飛行機を乗り継ぎ、飛行機での長旅が終了、無事に帰鹿することができた。

といったような感じで学会に遊びにとタイトなスケジュールで毎日を過ごしていた。学会は海外に限らず、勉強するだけでなくいろんな先生と交流することによって、研究がさらに発展していくので積極的に参加



(図6)



(図7)

するほうが良いと思われる。学会に参加しないで、観光ばかりするのは研究費の無駄遣いになるので好ましくない。学会に参加しながらも空いている時間をフルに活用すれば、いろんな観光地や買い物などにも行くことができる。ガイドブックに載っているような観光地だけではなく、私は海外に行くと地元のスーパーマーケットとか市場などに行くのが好きである。食料品とか日用雑貨などをみていると、その土地の人々の日常生活を垣間みることができる。日用雑貨も日本にはな

いものがあったりするので、そういったものを見ているだけでも結構楽しめる。食事については、その土地の料理を食べるのも良いが、当たり外れがあるので覚悟しておいたほうが良い。一番安心できるのは中華料理であろう。たいていどこに行ってもチャイナタウンがあるので、どこに行くか困った時には中華に行くのがよい。新しい発見、研究者間の交流そして合間のその土地を知ることこそ海外学会の醍醐味であろう。